

## お能で通じ合った話し

藤原 道夫

今居る住宅型老人ホームは「〇〇吉祥寺」といい、自立している人たちが暮らしている。自立できなくなると、別の場所にある介護付老人ホーム「〇〇調布」に移住することになる。

7月のある日、吉祥寺内のクリニックで診察が終わると医師が話し出した。「調布に居る女性の K さんを知っていますか？ この前診察した際、吉祥寺に居る 80 代の藤原さんはお元気でしょうかと尋ねられました」突然のことで一瞬戸惑ったがすぐに思い出した。「K さんが吉祥寺に居られた時に何度か食事を一緒にし、お能などの話しをしました。4, 5 年前に調布に移られたようです。2 年前に吉祥寺で謡「高砂」のレッスンがあった際に、車椅子に乗って参加しているのを見かけ、話し掛けました」「あれは私が勧めたのです。K さんは間もなく 100 歳になられ、認知機能が衰えて吉祥寺で親しかった人の名前はほとんど覚えていないようです」K さんはお能の話しが通じる私の名は忘れなかったのだ。

もう 10 年以上前、それまでに興味を持っていた雑多の事をまとめて小冊子『小楽地』を作り、知り合いの方々に配った。K さんにも差し上げると、能「俊寛」と「朝長」を取り上げている所を読み、「久しぶりにお能のスイッチが入った」とまるで少女のような笑顔で嬉々と話していた。「小鼓と大鼓とどちらがお好き？」と問われたこともある。彼女は大鼓派で私は小鼓派だった。「熊野」「松風」米の飯、とは初めて彼女から聞いた。話すほどに、若い時から謡や仕舞に励んできて能が心底好きだったことが伺えた。

そこで思いついた、『悠遊』第三十三号に出した能「千手」のコピーを調布に届け、K さんに読んで聞かせてもらおう。早速吉祥寺のマネジャーに文を託した。

翌々日の昼頃マネジャーから連絡が入った。「お預かりした文を調布の係に渡しました。係が拡大コピーをとったところ K さんご自身が文を読めるようになり、とても喜んでおられたようです」マネジャーの声が興奮気味に聞こえた。こちら声高に「それはよかった」と応答。「お能のスイッチが入った」と言った時の K さんのあの笑顔が浮かんできた。